

香月院と高倉學風

金子 大榮

い。忠實にして眞摯なる其の學風に於てである。

幼少の頃よりの訓育に依りて、聖教の講録を讀ましめられし私には、早くより先輩の軌轍といふことと香月院の名とが離れぬもののやうに植えつけられた。その後、先輩の軌轍といふも高倉創設已來のことであり、随つて講者の數も多いことを知るに至りて、時には香月院をも批判し、軌轍をも超克しようとする智見をも起せることである。それは必ずしも小智小見の思ひ上りではなく、面と聖教の眞意に接せんとするものの自然の感情として先輩も許容せらるることであらう。それを却て末徒として先輩の恩に報ゆる所以であるとさへ思はれたのである。然るに近年に至りて、私の學は再び香月院に親しましめらるることとなつた。それは其の學解に於てではな

香月院が恰も學寮の講者を代表するものの如く思惟せらるゝやうになつたことは、特にその學徳並び優れたるに依ることである。その事は住旧智見師編の『大谷派先輩學系略』に明細に記されてある。その學風と人格とが多數の俊才を門下に集め、その學系を承くる者、長く大谷學界に絶えなかつた。これを歴史的に回顧すれば、高倉の學寮が漸く全然時代に入らんとするに際し、香月院を出して講者を總合し、學風を決定せるものとも見らるゝのである。恐らく眞宗の聖教を學ぶに當りて、學說の異といふやうなことがあるは喜ぶべきことではないであらう。縦ひ學者の識見に相違あることは免れぬとしてもそれが學問となるといふやうなことは避けられねばならぬ。されど若し高倉の學寮にも、香月院の如き大人物が

無かつたならば、末學は或は學說の異に惱まされたかも知れない。今日、大谷派に學派なしといはれてゐることも、思へば香月院の遺徳によることであらねばならぬ。

されば其の香月院に大成せられし高倉の學風とは如何なるものであらうか。洵に夫れを明らかにすることは、以て香月院の遺徳を顯彰することともなるであらう。然るに其の學風を明らかにするといふことも、所詮は其の精神を繼承するの他にはない。しかも精神の徹底は必ずしも學解の株守を要とするものではないであらう。茲に私は香月院の學風を精神的に繼承することを以て、向後の眞宗學界の指針とせんとするものである。

二

「聖教は句面の如くこゝろうべし」といふことは、蓮如上人の教訓であつた。併し私にはそれが恰も香月院の言葉であるかの如くに感ぜしめられてゐる。それ程までに此語は香月院の學問方針となつてゐたのである。尤も如何なる典籍も句面の如く解すべきものであるとは相違がない。特に自宗の聖教に於ては、句面に違して解釋し

ては意味を爲さぬであらう。さうとすれば此語の如きは言ふに及ばぬことを言はれしものの如くである。

されど佛教の傳統は、必ずしもさう簡單には考へられない。經には已でに義に依りて語に依らざれの説があり論にも亦た教は月を指すが如きものといはれてゐる。それが一轉すれば、四悉檀、四秘密等の釋義ともなるのである。『涅槃經』には釋尊自ら「阿闍世のために涅槃に入らず」の語を縦横に解釋してをらるゝのは如何に領受すべきものであらうか。眞宗の聖教に於ても、同様の問題に續出する。若し何所までも聖教は句面の如く解すべきものならば、三經七祖の一致は果して領食せらるゝであらうか。また『教行信證』に於ける諸引文の如き、如何にしても祖訓の無理と思はるゝものが無いではない。而して其の祖訓を守るも必ずしも宗義の顯彰を見ぬやうなものがある。それは自然の訓讀と思はるゝものに改めても可いのではないであらうか。

然るに夫等の疑問こそは、聖教は句面の如く解くべしといふことに意味あらしむるものである。理を奪び義を重んずる聖道の諸宗は且らく措く。唯だ大聖の眞宗に歸

し如説修行を本とする他方眞宗にあらうは、必ず聖教は句面の如く解せねばならぬのである。一切の疑問は却てそれに依りてこそ氷解せらるゝであらう。この意味に於て香月院が、忠實に句面の如く聖教を解釋せられしことは、末學に取りての大なる指針となれるものといはねばならぬ。そこに眞宗學の一性格が決定せられたのである。

されど如説の領解といふことは、必ずしも容易なることではない。見方によりては佛教思想史は「如説」の意味の展開であるともいふを得るであらう。如説の意味を一定し得ば、宗派の生ずる理由はなかつたのである。同一の語も異なる感情で理解せらるゝ。佛智一齊演説法、衆生隨類各得解。そして夫等の衆生は悉く皆な如説の得解と信知してゐるのである。かく佛心の言教が凡智に領解せらるゝ時、凡智に固執あれば、全く佛語に違するものとなるであらう。縦ひ凡智に謙虛の心ありても、佛意容易に知り難きの感なきを得ぬのである。所詮、教に相應するといふことは、わが知解を働かさずして、唯だ教法を聞思するといふことにあらねばならぬ。然るに聞思の

道は入るに随つて彌々深く、親しくして益々遙かなるものである。されば句面の如く解すといふことにも、行學の精神を要することを忘れてはならぬ。

三

香月院の講録に於て、特に敬意を表せしめらるゝことは、その用意の周到なることである。如何なる聖教といへども、一言半句の不明なるところなきまでに領解するといふことは容易ではない。或は不可能といつても可いことであらう。それは古典に對する學者の惱むところである。然るに學寮先輩の講録を見るに、その聖教に對するや、多くは文々句々の解釋を主としつゝも、時には初學者に不明なる點を素通りにしてあるものが尠くはない。勿論、それは聖教としても重要な個所でないといふこともあらう。されど場所によりては、退いては學者その人の無識を表はし、進んでは後進への親切を缺くの憾みあるものもあるやうである。

然るに此の點に對する香月院の態度は、少しも曖昧なるところがない。一言半句といへども必ず其の解し得る

ところまで解釋し、而して其の如何にしても不明なるところに至りては、正直に其の不明なることを表白してをらるゝ。これ恐らく香月院の講録が、特に末學の指導となれる所以であらう。其の能く是の如きことを得たるは、特に各方面の學に優れたる門人の多かりしに依るといふことである。併し夫れは寧しろ香月院の學問的態度が、多くの門人を集めることとなつたと解すべきものであらう。それで香月院の講録は、特に信用の置けるものとなるのである。而して聖教は句面の如くといふことも、茲に徹底せるのである。

私は茲に聖教の總合的研究と分析的研究といふことを問題としたい。從來兎もすれば概論的研究を主とするものに依りて、文句の解釋のみを本とする態度を輕視せられて來た。併し實際は此の兩者相俟つものであつて、その一方のみ成立するものではない。確かに聖教の精神を直感する程の器量なしには、文々句々の解釋も能きるものではないであらう。所謂文字學者は文字そのものの意義すらも眞に領解してはをらぬのである。されどまた文句の解釋が周到でなくば、その概論的研究といふも、見

當違ひに陥ゐることが無いとはいへぬ。時には單なる獨斷の説に過ぎぬこともなるであらう。それ故に學に忠實なるものは、決して其の一方に偏してはならぬのである。

この點に於ても香月院の講録には留意すべきものが尠くはない。その聖教の分析的解釋に於ても、決して其の總合的領解は忘れられてはをらぬ。それ／＼の聖教の中心思想を明かにし、それに力を注いでをらるゝ。而してまた三經の一致を説き、七祖選定の事由を述べ、遂に一派の學風を大成せらるゝこととなつたのである。

四

古來、眞宗の教義を學ぶものには、大凡そ二つの傾向があるやうである。一は一般佛教學を基礎として、その上に眞宗學を建てんとするものである。一は直ちに眞宗の精神に入り、それを以て一般佛教學を見開かんとするものである。然るに前者を取る者は、往々にして眞宗独自の面目を見失はしめ、後者に偏するものは、時に眞宗は非佛敎的であるかの感を抱かしめるものがある。流石に

一派の學頭となれる人々は、そのいづれの態度を取らるるも、能く其の偏執に陥らざるを得られたやうである。されど其の問題は已でに解除されたのではない。それは長く眞宗學徒の課題たるべきものである。

思ふに茲には宗教一般と個々の宗教との關係の如きものがあるであらう。個々の宗教を離れて宗教一般といふやうなものはない。されど宗教一般の何物かを現はさぬやうな個々の宗教には何の意味があらう。洵に現前の事實としては、各宗派の他に、佛教一般といふものはない。されど各宗派ともに佛教である限り、佛教一般を現はすものが無くてはならぬであらう。加之、佛教は釋尊を教主として歴史的に展開せられた。随つて其の展開の相を尋ねることが、自から一般佛教より各宗派に及んでその教義を理解することとなるやうである。そこに佛教一般の思想を以て、眞宗の教義も解釋することも能き道があるやうである。されど其の佛教一般といふも、事實は唯識とか三論とか、天台とか華嚴とかいふものとなつてゐるのである。随つて佛教に依りて眞宗を學ぶといふことは、天台的眞宗、華嚴的眞宗となるも恐れなし

としない。そこに眞宗は唯た眞宗の聖教に依りてといふ學風も生ずるのである。

私は此の問題を次の如く解答したい。第一に眞宗と佛教との關係は、答と問との關係である。従來、眞宗の教を問として、佛教一般の道理を以て之に答うるものとせられた。それは或る點に於ては許可さるゝことではあるが、それを極端にする時には、眞宗独自のものの無くなるも當然である。それは寧ろ反對に、佛教は問であり眞宗は答であるべきであらう。佛教の史的展開といふも種々なる問題を殘せるに由るのである。その一切の問題を眞宗が答へる時、そこに眞宗の佛教統一が見らるゝのであらう。それは佛教一般より出發して眞宗學に達するところの道であらねばならぬ。

第二に眞宗と佛教學との關係は、萬象と眼との關係に類するものである。同一事物も見る眼に依りて異なる。甲の眼を以ては到底知るを得ざりしものが、乙の眼に依りて明瞭にせらるゝといふこともあるやうである。大小の經典、その所説甚深にして知り難いものが多い。實觀といひ唯識といひ、中道といひ一乘といふ。それは各宗派

の所説によりて一應理解さるゝといへば、さうもいへるであらう。されど凡智の我等には、常に霞を距てて花を見ても憾なきを得ぬものがある。然るに夫等の甚深なる教理も亦、本願念佛の教を行信するものに依りて自然に見開かるゝといふことがあるやうである。それが眞實に成就すれば、そこでも眞宗即佛教一般の道が方證せらるゝであらう。

高倉の學風には、如上の兩者は共に行はれて來た。その中、香月院の學風は、特に眞宗獨自のものを明らかにすることに集中せられたといふことである。然らば其の學風を承くるものは、特に後者に道を徹底すべきではないであらうか。兎もあれ私は、香月院によりて、一派の學風といふ事が、特に主要の問題とせられたることに、深い感銘を覺えざるを得ぬのである。

五

我等、今日に於て最も有り難きことは、眞宗の聖教を學ばしめられたといふことである。それを一般的にいへば、學に宗派があることの喜びであるともいへよう。世

に黨派程醜くきものはない。されば宗派我は常に反省せらるべく、學問の如きは斷然拒否すべきものである。併しそれに依りて我等は宗派そのものの善さを見失うてはならぬであらう。私にはそれなしには學問といふものが成立せぬもののやうにさへ思はるゝ。

一、宗學とは教に育てらるゝといふ態度である。それ故に聖教を學ぶものは必ず常に謙虛の心に住せねばならぬ。我等の我慢は、その教に依りて次第に碎かれゆくのである。この當然なるべき教學的態度は、今日の知識學では失はれて終うた。その思ひ上れる態度は、聖賢の古典をも縦横に批判し、學の増進するに隨つて我慢も亦た増進するのである。かくして其の脱くところは、いづれの宗派にも偏せずといひつゝ、要するに我見を主張するに過ぎない。我等の聞かんとするものは道理の聲であるが、耳底に響くものは徒らに學者の決意のみである。尤もかゝる我見は、宗派を有つものの上にも感ぜられる。而してそれは一層嫌惡すべきものには違ひはない。されど夫等は畢竟、教法を聞かせぬものといふべきであらう。宗派我を超えしむるものこそ、宗派の學であるべき

である。

二、宗學には必ず傳統といふものがある。それは我等の領解をして力強く感ぜしむるものである。今日の知識學者には、謙虚なる人々は無いのではない。縦へ聖賢の教法を宗とせずとも、道理を學ぶものである限り、我見を碎いてゆくことが當然であるともいへやう。されど夫等の人々の言説には、力強い學が乏しい。それは其の領解が傳統的のものでないからである。道理を受容せる主體が個人的であるからである。これに對して學に傳統を有つものの力は、その學の主體が超個人的である。自身は語らしめしめらるゝものであつて語るものではない。それが力強い力を感じしむるものである。

今や國家としても、教學の意味を見直さねばならぬこととなつて來た。この時に當りて眞摯なる學風を残せる香月院の遺徳を思ふてとは、洵に意味深きことといはねばならぬ。茲に眞宗學徒も奉公の道を見出すの喜びが與へられつゝあるのである。その幸恵は深く銘記すべきものであらねばならぬ。

—昭和一八・一・三一—

香月院遺徳顯彰の記念に艸せるもの、大谷學報の原稿をと

の要求に應じて筐底より取り出しつ。